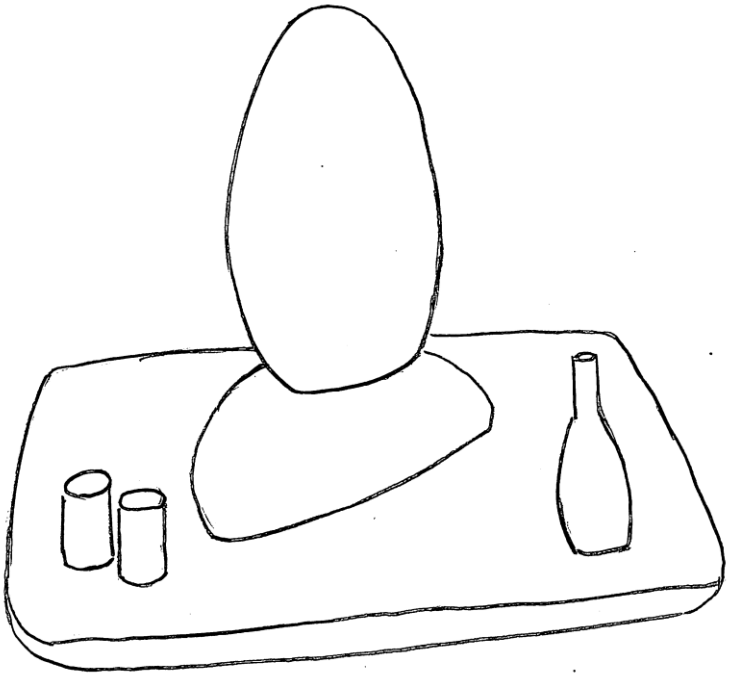
井月さんを語り継ごう

①お墓

伊那市美篶の末広に、井月さんのお墓があります。ずんべらぼうの、はげ頭のような形のお墓には、いつも誰かがお酒を持ってきて、お供えしてあります。

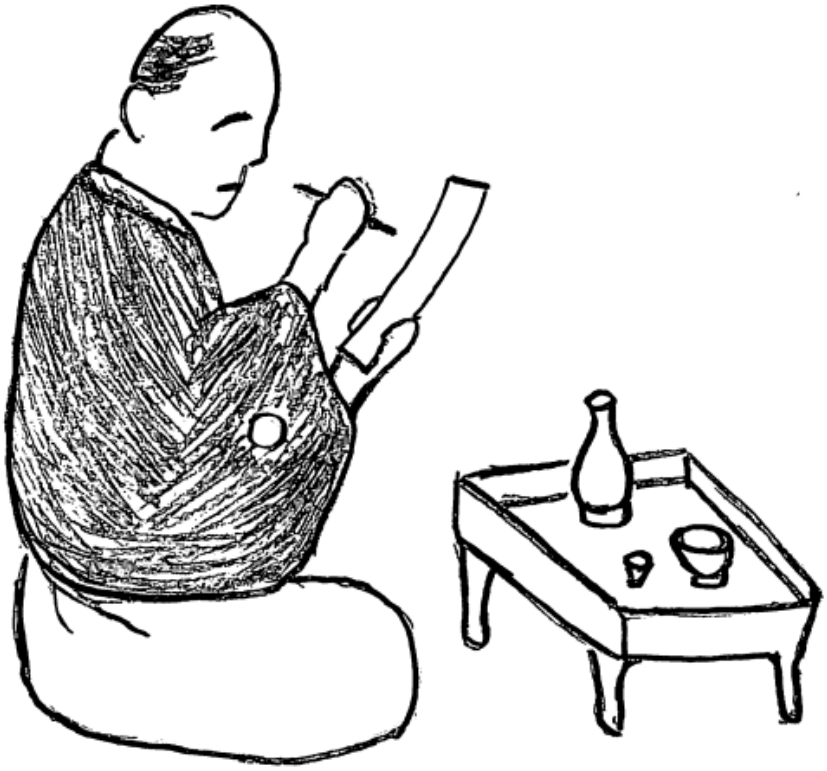
いったい、どんな人だったのでしょうか。



②千両千両

井月さんは、自分の家を持たず、人の家を泊まり歩いて暮らしていました。

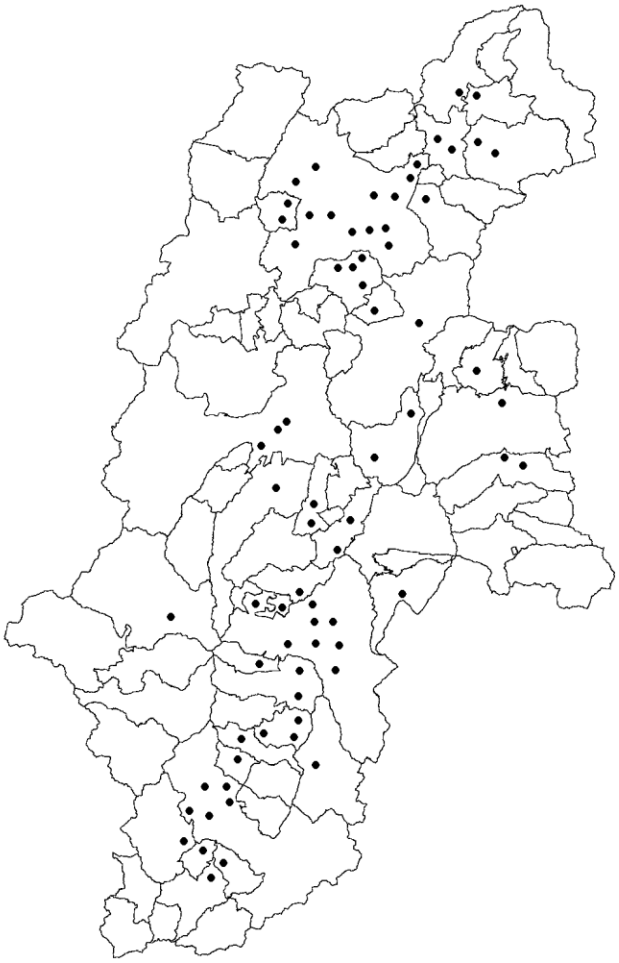
そして、お酒や食事をいただくと「千両千両」と言って喜び、お礼に俳句を書きました。井月さんの字は、大変上手だったので、村人たちに喜ばれたのです。

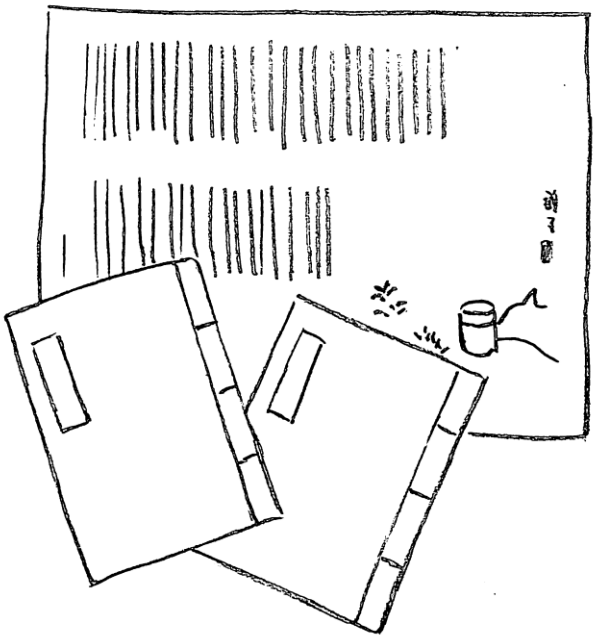


③俳句を集めて本を

そうやって旅暮らしをしながら、井月さんは仲間をたくさん作りました。仲間たちから俳句を集め、本を出版しようとしていたのです。

井月さんは、信州全土を歩き回り、41歳のときに飯田で、42歳のときに高遠で、43歳のときには長野で出版しました。

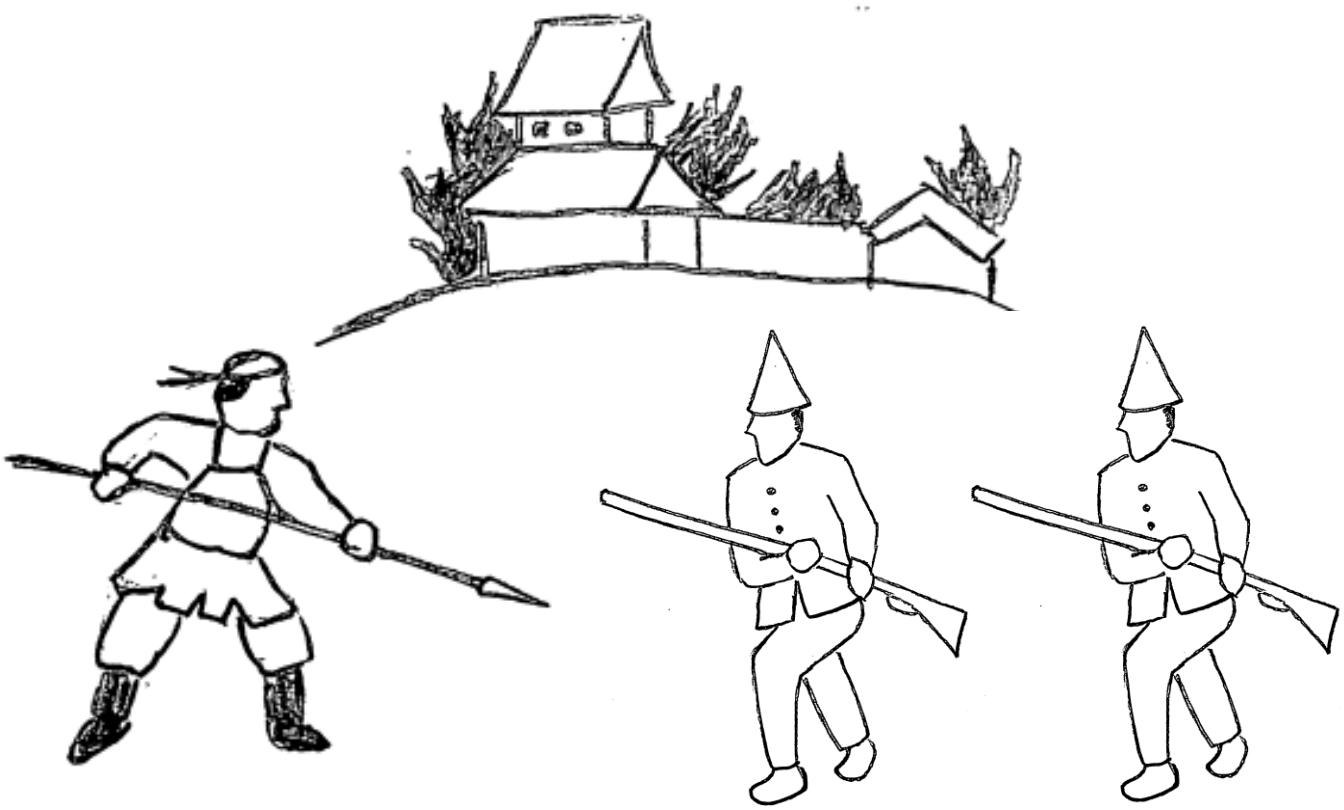




④戊辰戦争

出来上がった本を手みやげにして、井月さんはふるさとの越後に帰り、お母さんの墓参りをしました。

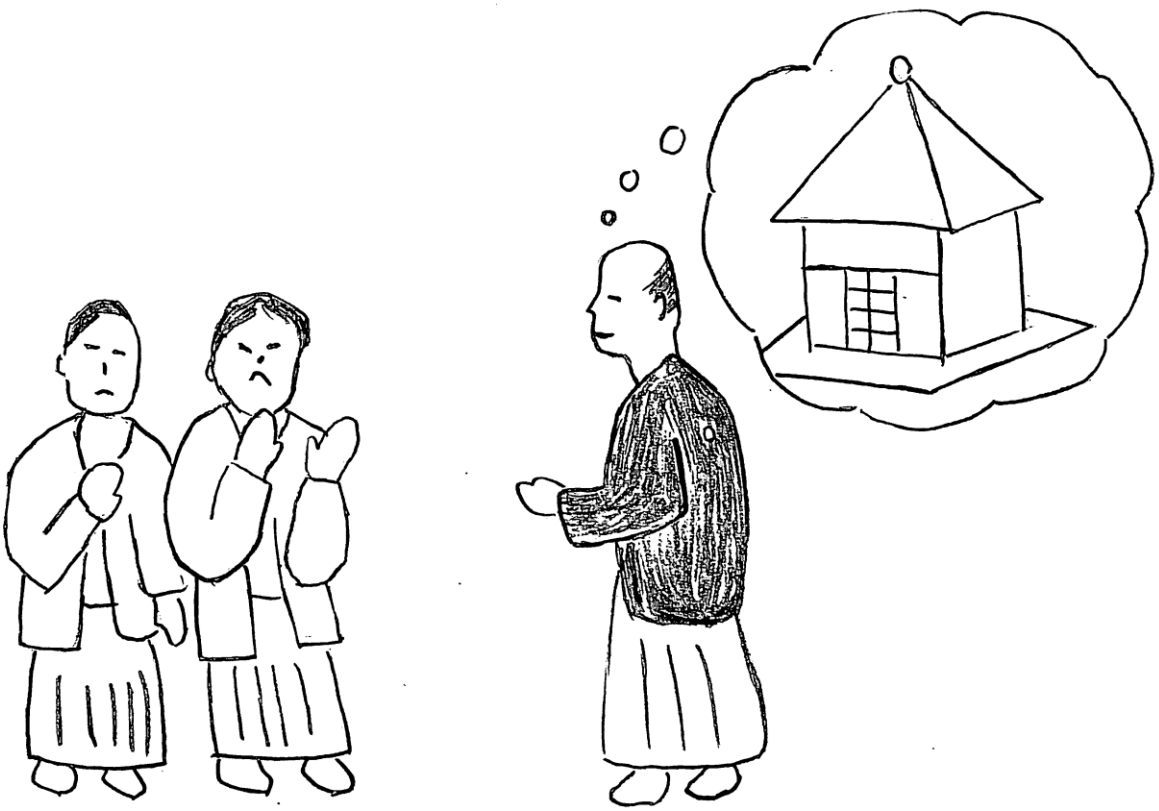
しかしそのあと、戊辰戦争が起こって、越後の町は、新政府の軍隊に焼かれてしまったのです。井月さんは、また信州へ戻って行きました。



⑤俳句の道場を作りたい

井月さんは、俳句の道場を作ろうと思い立ちました。仲間に囲まれながら、信州で暮らしたいと願ったのでしょう。道場を建てるのに良い場所を、伊那谷の春近村に見つけました。

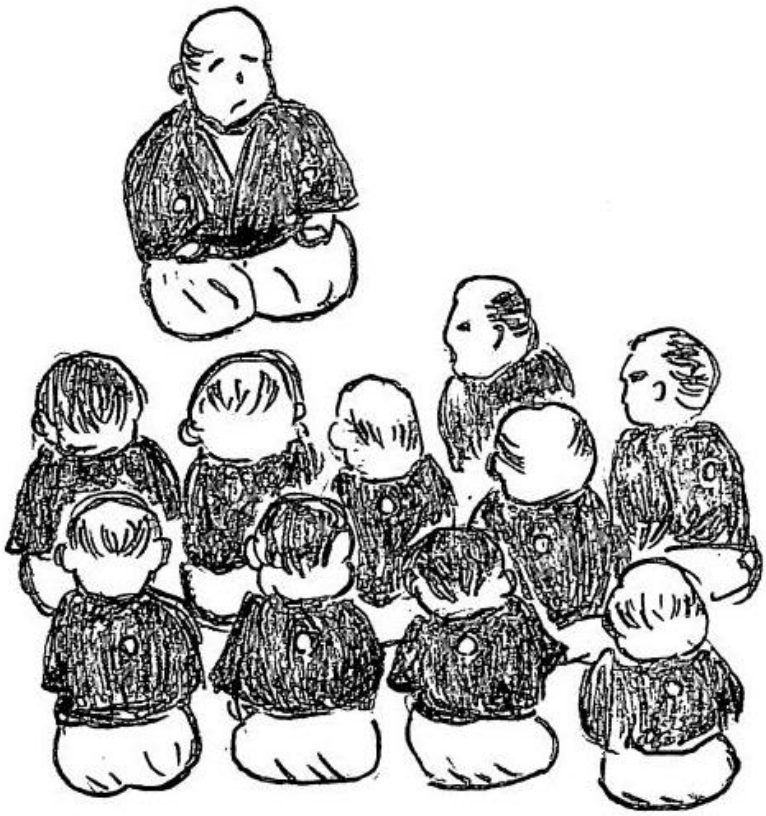
ところがそのころ、新政府が「戸籍」という法律を作ったのです。井月さんには戸籍がなく、道場を建てることができなくなりました。



⑥なぜ帰らない

村人たちは、井月さんに、越後へ帰って戸籍をもらってくるように勧めました。そして井月さんのために、送別会を盛大に開きました。

ところが、いつまでたっても井月さんは越後へ帰りません。いったい、どうしたというのでしょう。戊辰戦争で焼かれた越後には、もう帰る場所がなかったのでしょうか。



⑦置き去り

業を煮やした村人たちは、井月さんを善光寺まで連れ出しました。そして、井月さんがわらじのひもをぐずぐず結んでいるうちに、置き去りにして帰ってしまいました。

善光寺まで来れば、ふるさとの越後まであと半分の道のりです。きっと井月さんは帰るだろうと、村人たちは思ったのでしょう。

⑧行き場がない

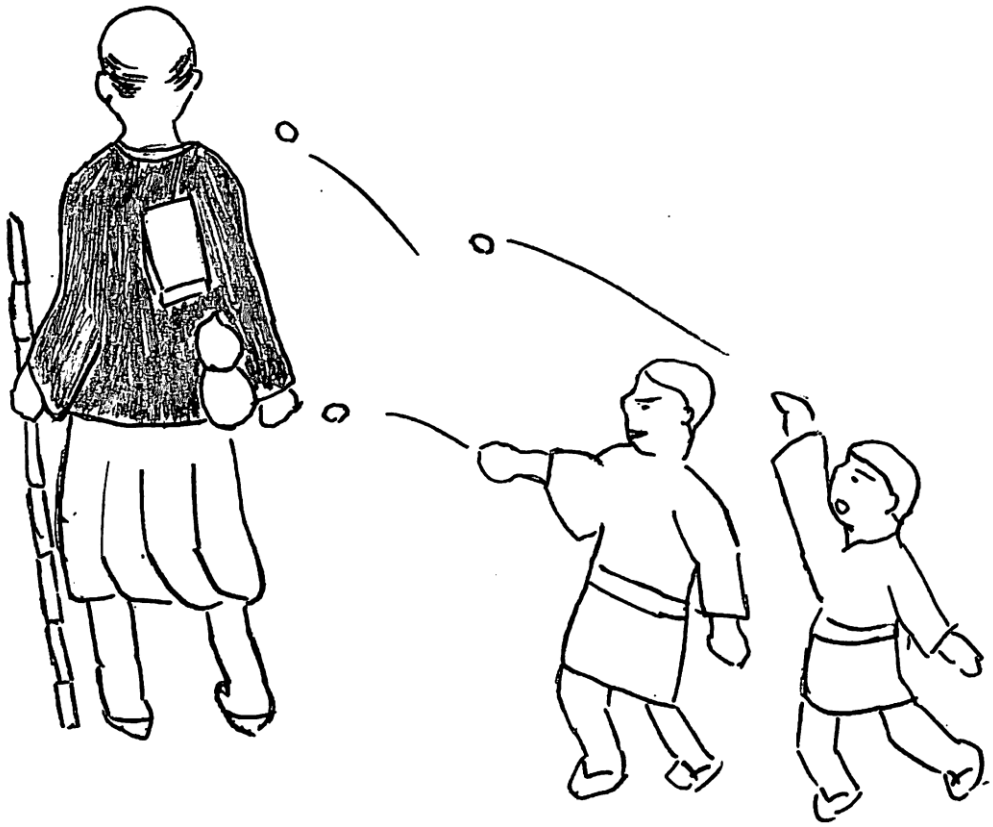
井月さんは越後に帰らず、仲間がたくさんいる中条村へ行きました。そこにちょうどいいお堂を見つけて、今度こそ俳句の道場にしようと思ったのです。

しかし中条村でも、戸籍がないので断られてしまいました。行き場のない井月さんは、また伊那谷へ戻って行きました。

⑨嫌われ者に

道場を作る夢を失った井月さんは、お酒におぼれるようになりました。着物はボロになり、村人たちに嫌われました。腰にひょうたんをぶらさげて、つえをつきながらトボトボと道を歩くと、村の子どもたちが石を投げつけました。

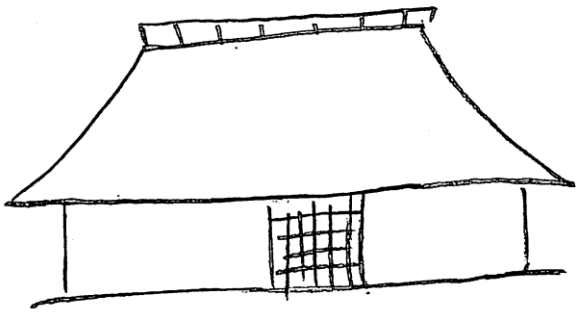
それでもなお、本を作るために、家々を回って俳句を集める暮らしを続けました。



⑩ようやく戸籍が

俳句は集まり、本の原稿は出来上がりましたが、飲んだくれの井月さんにはお金がなくて、出版することができませんでした。

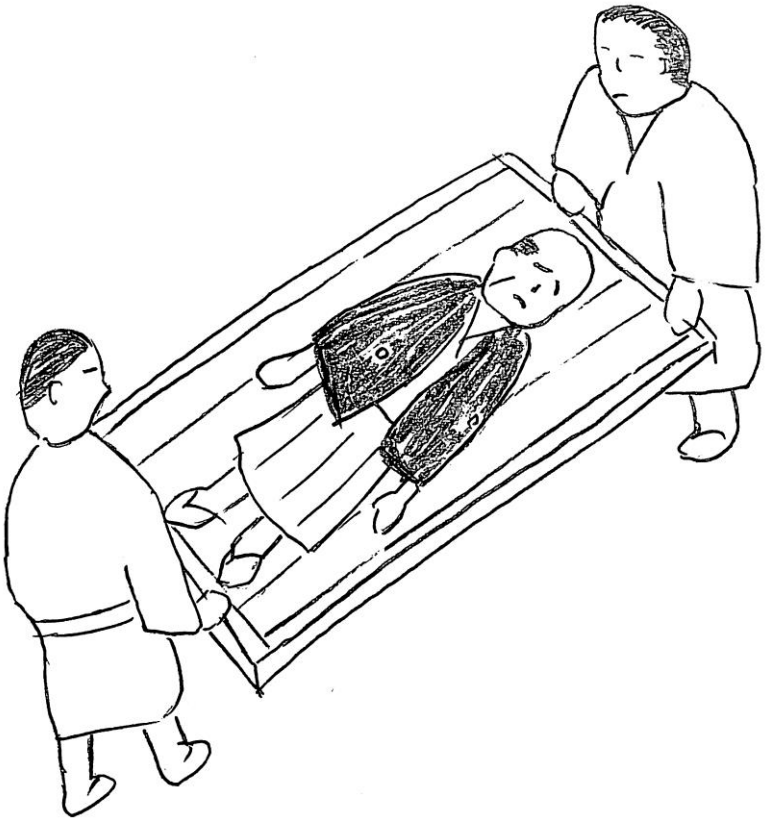
そんな井月さんの暮らしぶりを、美篤村の仲間たちが見かねて、戸籍を作ってあげました。また、井月さんのためにお金を出し合って、本を作ってあげました。64歳のときでした。



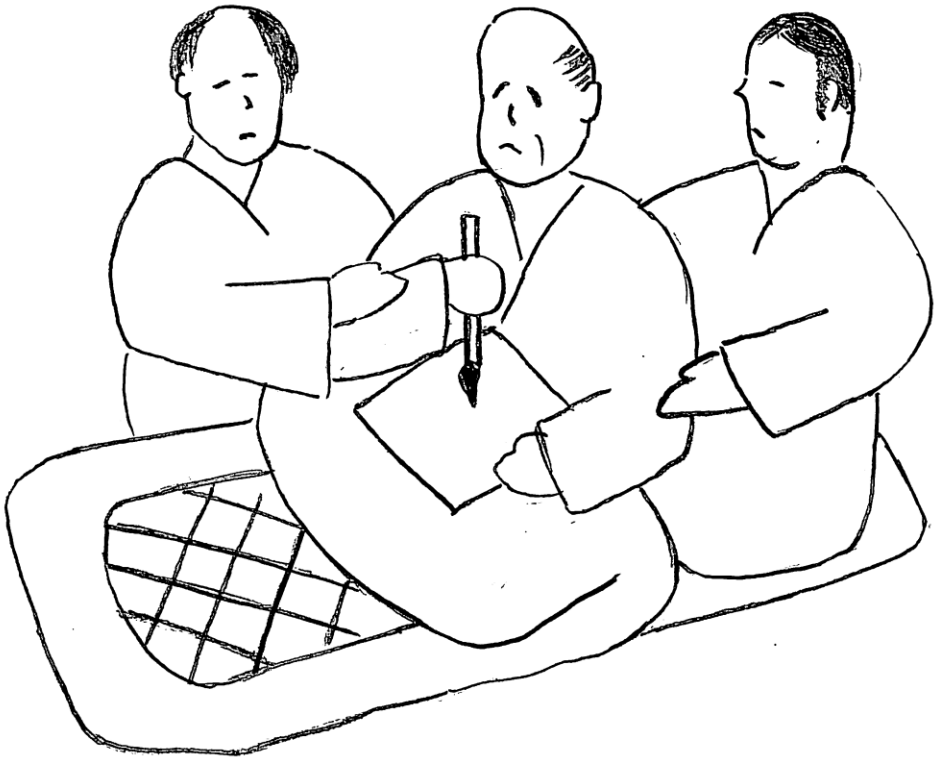
⑪行き倒れ

しかし、それでも井月さんは、旅暮らしをやめませんでした。自分の生き方を変えることができなかったのでしょう。そしてとうとう、明治19年の冬、東 伊那村の田んぼの中で、行き倒れになっているのを発見されました。

村人たちは、井月さんを戸板に乗せて火山峠を越え、となりの富県村まで運びました。



⑫どこやらに

　それから井月さんは、美篤村の家へ移され、しばらく看病してもらいましたが、明治20年三月十日、66歳で亡くなりました。

　自分の生き方を最後までつらぬき通し、安らかな気持ちで息を引き取ったのでしょう。亡くなる直前に「何処やらに鶴の声きく霞かな」という俳句を書き残したと伝えられています。